

# 立川市第4次地域福祉計画 中間評価

令和5年4月

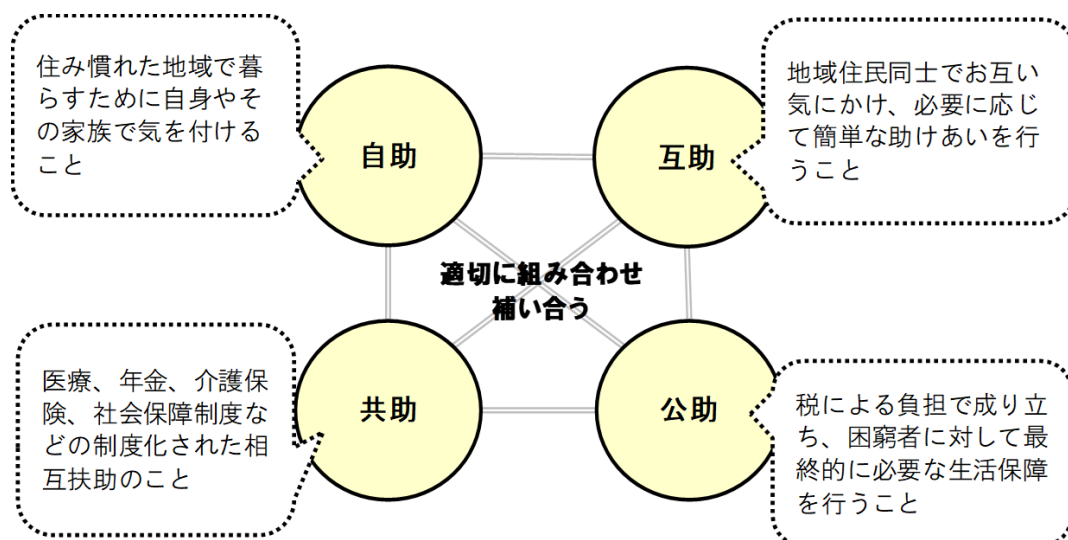
立川市福祉保健部地域福祉課

## 1 第4次地域福祉計画策定時の考え方とめざす方向

地域には福祉、保健、医療をはじめ、防犯・防災への支援など多様なニーズをもつ住民が暮らしており、なかには相互に関連しあう複合化・複雑化した課題への対応が求められることも増加しており、地域福祉の考え方は、サービスを中心とした福祉のイメージよりも幅の広いものといえる。さらに、地域福祉は、予防、早期発見、早期対応に視点を置きながら、住民の気づきの力を最大限に生かして、個別の支援につなげ、さまざまな機会、場を活用して、住民同士の支えあいや、主体的な福祉活動、地域活動に広がるよう地域のネットワークを築くことに重点をおいている。

また、国の政策動向としては、平成30(2018)年4月施行の改正社会福祉法に基づき設置された「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」最終報告書で、「断らない相談支援」「参加支援(社会とのつながりや参加の支援)」「地域づくりに向けた支援」の3つの支援を一体的に行う事業の創設をすべきとの提言がなされている。

これらの考え方をもとに地域づくりを進めるにあたっては、社会福祉法により地域福祉の推進役として位置づけられている社会福祉協議会と積極的な連携を図り、住民の主体的な取組を支援していく必要があり、住民やさまざまな地域資源の力を発揮しながら、「自助」「互助」「共助」「公助」(下図参照)を適切に組み合わせ、市と住民、関係機関、事業者等が協働しながら支えあう地域づくりを進めることにより、地域課題の解決を目指すことが求められている。



## 2 計画策定の位置づけ

本計画は、社会福祉法第 107 条に規定する「市町村地域福祉計画」であり、「立川市第 4 次長期総合計画後期基本計画」の「福祉・保健」分野における個別計画として策定された。また、社会福祉法第 109 条で地域福祉の推進役として位置づけられている立川市社会福祉協議会が策定する「第 5 次立川あいあいプラン 21」（地域福祉市民活動計画）とも互いに補完関係にあり、これまでの推進にあたっては、合同の推進委員会において検討などを行っている。

## 3 計画期間と見直し

本計画は、令和 2 年度から令和 6 年度を計画期間としているが、国の福祉施策の根本的見直しや社会情勢の著しい変化があった場合には、これらの状況に柔軟に対応するため、必要に応じて施策を再検討し、本計画の必要な見直しを行うこととしている。

本市においては、重層的支援体制整備事業の創設を想定して重点取組項目を掲げ、本計画を策定した。その後、国の政策としても地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律（令和 2 年法律第 52 号）により、社会福祉法の一部が改正された。地域住民の複雑化・複合化した支援ニーズに対応する包括的な支援体制を構築するため、市町村において、属性を問わない相談支援、多様な社会参加に向けた支援及び地域づくりに向けた支援の 3 つの支援を一体的に実施する重層的支援体制整備事業が令和 3 年 4 月 1 日に施行されたことを受け、本計画中間評価においては、重層的支援体制整備事業等を想定して決められた以下の 3 つの重点取組項目を評価することにより、本計画の見直しの如何を判断することになると考えられる。

### ・重点取組項目 1

「相談支援包括化推進員を配置し、さまざまな専門機関と連携して、身近な地域でまると相談を受け止める。」

### ・重点取組項目 2

「地域福祉コーディネーターの活動を強化して、人と人、人と地域をつなぎ、地域での交流の場づくりを進める。」

### ・重点取組項目 3

「大小さまざまな多機能拠点「地域福祉アンテナショップ」をつくり、身近な場所でふらっと立ち寄れる、相談や交流、活動の場を広げる。」

重点取組項目の評価については、各重点取組項目の目標を掘り下げ、①具体的な取組、②課題、③今後の方向性の 3 つの視点で、できたこと・できなかったことを整理し、そこから課題の抽出等の評価を行った。評価の詳細は資料 1 のとおりである。

評価の結果、国の政策に新たな取組が加わったものの、本計画における重点取組項目の方向性等について、概ね適正であることを確認できたため、本計画の見直しは行わず、本計画目標の達成を目指し今後さらに取組を深めていくこととする。

なお、本計画は、各福祉分野が共通して取組むべき事項を記載する、いわば福祉分野の「上位計画」として、重層的支援体制整備事業実施計画、老人福祉計画、介護保険事業計画、地域における医療及び介護の総合的な確保の促進に関する法律に基づく市町村計画、障害者計画、障害者福祉計画、子ども・子育て支援事業計画、次世代育成支援対策推進法に基づく市町村行動計画、健康増進計画、その他の関連する計画との調和を図り、かつ、福祉・保健・医療及び生活関連分野と連携することが求められている。

#### 4 計画の進捗管理

計画の進捗管理は、外部委員会である「立川市地域福祉推進委員会」の設置と庁内組織である「立川市地域福祉推進連絡会」での検討等により行う。

##### (1) 「立川市地域福祉推進委員会」の設置

本計画の実現に向けては、地域住民や自治会、民生委員、児童委員、ボランティア団体、NPO、社会福祉関係事業者などによる主体的な活動による部分が多く、関係者の理解と連携が不可欠である。このため、市民、学識経験者、関係機関・団体からの推薦者等による「立川市地域福祉推進委員会」を設置し、計画の進捗状況の把握や委員会での意見交換を踏まえて、関係者との連携や調整の方法なども検討しながら、施策の方向に沿った事業や取組の展開に努めてきた。

地域福祉計画と立川市社会福祉協議会が策定する「第5次立川あいあいプラン21」（地域福祉市民活動計画）は、地域福祉の推進における両輪の計画として、相互に補完し、一体的に推進するものであるため、「立川市地域福祉推進委員会」は、社会福祉協議会と合同で開催している。令和2年度から令和4年度において以下の日程で開催し、「地域福祉アンテナショップの設置に向けた検討」、「3つの重点取組項目の目標達成に向けた具体的取組みの検討」、「地域福祉活動における新型コロナの影響について」、「新型コロナ感染拡大の影響を受けて見えた地域の生活課題」、「今後に向けて求められること」及び「地域福祉アンテナショップの今後の展開について」等について、意見交換を行った。

（令和2年度）

- ・ 令和2年6月24日（水曜日） 第1回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和2年8月6日（木曜日） 第2回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和2年9月11日（木曜日） 第3回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和3年3月22日（月曜日） 第4回立川市地域福祉推進委員会

（令和3年度）

- ・ 令和 3 年 5 月 27 日（木曜日） 第 5 回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和 3 年 7 月 29 日（木曜日） 第 6 回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和 3 年 10 月 1 日（金曜日） 第 7 回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和 4 年 2 月 17 日（木曜日） 第 8 回立川市地域福祉推進委員会  
（令和 4 年度）
- ・ 令和 4 年 7 月 29 日（金曜日） 第 9 回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和 4 年 10 月 11 日（金曜日） 第 10 回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和 4 年 12 月 15 日（木曜日） 第 11 回立川市地域福祉推進委員会
- ・ 令和 5 年 2 月 17 日（金曜日） 第 12 回立川市地域福祉推進委員会

## （2）「立川市地域福祉推進連絡会」の役割

「立川市地域福祉推進連絡会」は、地域福祉を推進するための庁内組織として、計画に位置づけられた取組の現状などの情報共有・情報交換の場、また「立川市地域福祉推進委員会」での意見を踏まえ、地域課題の解決に向けた検討の場などとして開催した。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から書面開催となり、令和 3 年度については未開催となった。令和 4 年度には、以下の日程で開催し、「中間評価」についての意見をいただいた。

（令和 2 年度）

- ・ 令和 3 年 2 月 5 日（金曜日） 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から  
書面開催

（令和 3 年度）

- ・ 未開催

（令和 4 年度）

- ・ 令和 5 年 2 月 15 日（水曜日） 第 1 回立川市地域福祉推進連絡会

## 5 中間評価の在り方について

地域福祉推進のためには、現状や課題、成果について分析し、具体的にわかりやすく伝えていく必要があるため、「何をもちて地域福祉が進んだといえるか」を測るための指標が不可欠である。これまでの地域福祉推進の度合いは、参加者数や参画団体数、会議や研修の回数など量的な視点から測られることが多いのが現状で、量的な視点だけでは十分ではないと考えられ、質的評価（事業実施の結果どのくらい課題の解決につながっているか、また事業の対象者の満足度はどうかなど）や、プロセス評価（取組を通して住民参加や連携が進んでいるかなど）が重要と提案されている。これを受けて、本計画の実現のための評価の手法を、どのような指標を設定して行うかについて、平成 28（2016）年 1 月から平成 30（2018）年 3 月まで立川市地域福祉推進委員会で検討し、「地域福祉推進のための指標づくり報告書」をまとめた。

## 6 地域福祉推進のための4つの要件（「地域福祉推進のための指標づくり報告書」より抜粋）

立川市地域福祉推進委員会では、「参画し、協働し、自らつくるまちづくり～すべての人が自分らしくいきいきと、生きがいをもって暮らせる地域をめざして～」とは、どのようなまちなのか検討を重ね、取組テーマとして『孤立のないまち～つながりが増えて、広がったか～』と提示し、その実現のために必要な要件として、以下の4つを挙げた。

### ①地域に参加する人の裾野が広がったか

高齢、障害、児童などと対象を限定せず、多様な人が参加できる地域活動があり、人とのつながりや生きがい、やりがいを感じられる。

### ②多様な人が集まることのできる場が創出されたか

高齢、障害、児童などと対象を限定せず、多様な人が集まることができる場所がある。

### ③地域福祉、地域活動の担い手（リーダーやコーディネーター）の発掘や支援ができたか

地域や社会のさまざまな課題解決に向けた市民活動を支援する基盤が整備され、たくさんの方が自主的・自発的に地域活動に取り組んでいる。

### ④地域住民と関係機関の連携・協働は進んだか

フォーマルサービスとインフォーマルサポートが連動しており、必要に応じて連携できる体制が整っている。また、狭義の福祉領域だけで完結せず、関係諸領域が相互に連続性を保っている。

上記、4つの要件により、本計画にある8つの施策に示される各課の主な取組を分類して評価することにより、本計画における以下の3つの目標の評価につながると考えられる。

#### 【第4次地域福祉計画における3つの目標】

- ・見守り支えあいながら、だれもが状況に応じて、人とつながり、自分らしく活躍できるようにします。
- ・いつでも気軽に相談や交流ができ、必要な支援・福祉サービスを受けられるようにします。
- ・互いに助けあいながら、安全・安心に暮らせるようにします。

# 理 念

## 参画し、協働し、自らつくるまちづくり

～すべての人が自分らしくいきいきと、生きがいをもって暮らせる地域をめざして～

### 基本方針

人は一人ひとり違うということに向き合い、多様性を理解、尊重し、地域で生活する市民の目線で、さまざまな分野とのつながりを意識し、目標に取り組みます

### 目 標

見守り支えあいながら、だれもが状況に応じて、人とつながり、自分らしく活躍できるようにします

いつでも気軽に相談や交流ができ、必要な支援・福祉サービスを受けられるようにします

互いに助けあいながら、安全・安心に暮らせるようにします

### 施 策

立川市は、市民、関係団体・事業者等と協働し、

1 地域活動・ボランティア活動を活性化します

2 一人ひとりが自分らしく活躍できる場をつくります

8 福祉以外の分野を含む、さまざまな主体との連携体制を築きます

3 生活に身近な圏域でまるごと相談できる体制を整備します

7 大小さまざまな形態の福祉のまちづくりの拠点を醸成します

4 地域の防犯・防災への取組を高めます

5 ユニバーサルデザイン・多文化共生のまちづくりを進めます

6 必要な情報を分かりやすく、必要な人が取得できるようにします

## 7 評価の方法について（「地域福祉推進のための指標づくり報告書」より抜粋）

数値目標の増減だけで、「多いほうが良く、少ない方が悪い」と、地域福祉の推進を評価することは困難である。複数の評価基準項目と指標に基づき、最終的な評価を行うことが重要という視点で評価を行った。

### ■評価基準

#### ①量的評価

予め定められた量的目標と、実績値をもとに4段階で評価。

A：計画通り、または計画を上回る実績をあげている

B：計画の60～100%未満の実績

C：計画の1～60%未満の実績

D：未実施

#### ②質的評価

事業実施の結果どのくらい課題が解決されているか、また事業の対象者の満足度はどうかについて、文章表現で評価。

#### ③プロセス評価

取組を通して住民参加や連携が進んでいるかについて文章表現で評価。

### ■評価後に整理すべきこと

#### ①課題・問題点

計画どおりに進んでいる場合は、その要因は何か。進んでいない場合はその原因は何か。

#### ②今後の方向性

課題・問題点に対し、どうすればより良く事業展開できるか、改善策はなにか。

## 8 具体的な評価の進め方について

これらの考え方をもとに、全5か年の本計画期間の3か年目に中間評価を行った。8つの施策に対する庁内各課の「主な取組」の評価については、「第4次地域福祉計画取組 進捗状況」を用いて評価が行われている。その各課による評価を資料1のとおり、地域福祉推進のための4つの要件に分類し、前述「7 評価の方法について（「地域福祉推進のための指標づくり報告書」より抜粋）」①量的評価、②質的評価、③プロセス評価を行った。

## 9 中間評価総括

中間評価の総括としては、資料1のように、量的評価においては、「①地域に参加する人の裾野がひろがったか」では、地域福祉コーディネーターの活動により、コロナ禍であっても活動を継続し成果を上げることができ、社会的孤立の防止に寄与することができた。その一方で、「④地域住民と関係機関の連携・協働は進んだか」ではコロナ禍



で困難ケースは増加しており、重層的支援体制整備事業を通してインフォーマルサポートとも連動した解決する仕組みの構築が必要であると考えられ、それらのことを踏まえ4つの要件とも全てにおいてC評価となった。

質的評価においては、「①地域に参加する人の裾野がひろがったか」では、コロナ禍によりイベントが中止となったものもあり、地域活動は限定的ではあったものの、「②多様な人が集まることのできる場が創出されたか」では、民間事業者との連携により活躍の場が創出され、適切なタイミングでの支援を確認することができた。

プロセス評価においては、「①地域に参加する人の裾野がひろがったか」で、実施方法の工夫により地域に参加する人の裾野を広げることができた。オンラインの活用等ポストコロナだからこそ、新しい分野の取組を推進することができたと考えられる。など

これらを受けて、本計画の進捗状況としては概ね順調に推移していると評価し、引き続き「立川市地域福祉推進連絡会」による取組状況の情報共有・情報交換を行い、他の個別計画との整合性を図っていく。また、「立川市地域福祉推進委員会」で行っていた本計画の進捗管理については、次期計画策定に向けた「立川市地域福祉計画策定検討会」に引継ぎ、進捗管理とともに振り返りを行いながら次期計画の策定検討を行いつつ目標達成に向けて取り組んでいく。

## ① 地域に参加する人の裾野が広がったか

高齢、障害、児童などと対象を限定せず、多様な人が参加できる地域活動があり、人とのつながりや生きがい、やりがいが感じられる。

## 【「地域に参加する人の裾野が広がったか」に関する主な取組】

1-1 地域福祉コーディネーターの活動強化（地域福祉）、1-3 子ども未来センターを拠点とした市民活動の活性化（市民協働）、1-4 地域の支えあいネットワークの推進（高齢福祉）、2-1 障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちづくりの推進（障害福祉）、5-2 ごみ出しの支援（ごみ対策、地域福祉、福祉総務、高齢福祉、障害福祉）、5-4 小・中学校を中心とした福祉学習の実施（指導、障害福祉）、5-6 多文化共生の理解促進（市民協働）、8-2 多文化共生推進団体との連携（地域福祉、市民協働）、8-6 総合的な見守りシステムの構築（地域福祉、福祉総務、各課）

## 【量的評価】：C

地域福祉コーディネーターの活動により、地域懇談会の延べ参加人数は、令和2年度 2,457 人、令和3年度 3,473 人、支えあいサロン登録数は令和2年度 223 箇所、令和3年度 235 箇所とコロナ禍であっても活動を継続し成果を上げることができたことにより、社会的孤立の防止に寄与しました。懇談会参加人数や支えあいサロン登録数は増加はしているものの、協働イベントの中止や見守り活動の停滞などもあり、量的評価としてはC評価となりました。

## 【質的評価】

コロナ禍で、小学校交流イベント「コラボアート」、及び「世界ふれあい祭」をはじめとする協働イベントは中止、地域見守り活動も停滞する等、地域に参加する人の裾野の広がりは一時的に限定されています。

## 【プロセス評価】

コロナ禍でも、障害者週間には、短編映画「バリアフルライフ」を上映し、総来場者数は600人キープできました。また、立川市動画チャンネルへの配信等を行い、実施方法の工夫により地域に参加する人の裾野を広げました。また、子ども未来センターの協働事務室を拠点とした市民活動の活性化の点では、PLAY! PARK等の地域との新しいネットワークの構築が進んでおります。オンラインの活用等ポストコロナだからこそ、新たな分野の取組を推進することができました。

## 【課題・今後の方向性】

オンライン活用のインフラ整備や日本人と外国人との相互のコミュニケーション等については課題が残っています。今後、少子高齢化が進み、地域の担い手の減少が危惧されていく中で、ICT、AI、メタバース等仮想空間の活用や、近隣市町村との広域連携等も検討できるかもしれません。

## ② 多様な人が集まることのできる場が創出されたか

高齢、障害、児童などと対象を限定せず、多様な人が集まることのできる場所がある。

## 【「多様な人が集まることのできる場が創出されたか」に関する主な取組】

2-2 民間事業者等との連携による活躍の場の創出（地域福祉、市民協働、産業振興）、2-3 多様な学習の機会と場の提供（生涯学習、福祉総務）、7-1 多機能拠点「地域福祉アンテナショップ」の設置（地域福祉）、7-2 支えあいサロン活動の促進（地域福祉）、7-4 地域学習館の効果的な利用促進（生涯学習推進センター）、8-1 商店街その他民間事業者との連携（福祉総務、産業振興）、8-4 自治会との連携（市民協働）、8-5 放課後子ども教室の開催（子ども育成）

## 【量的評価】：C

気軽に出入りできる「場」として、相談、専門職との連携、地域活動の拠点「地域福祉アンテナショップ」が、生活に身近な圏域で大小様々にあることを目指しています。全部型の「地域福祉アンテナショップ」は、令和3年度に一番町北住宅の「にこにこサロン」を認定、令和4年度には若葉町の「BASE☆298」を認定し、市内に2箇所となりました。協働型の「地域福祉アンテナショップ」は令和4年度に5箇所開設し、地域住民、事業者等との協働で企画・運営しており、様々な活動を通じて多世代が交流する多機能拠点となっています。アンテナショップの開設や協働のまちづくり推進事業4事業の実施等はありませんでしたが、自治会員の減少等コロナの影響による地域のつながりの希薄化の影響は大きく、場の創出という観点での量的評価はC評価となりました。

## 【質的評価】

民間事業者等との連携による活躍の場の創出としては、協働のまちづくり推進事業として令和3年度に「気軽に立ち寄れる「よろず相談室」」、「発達障害児の子育てを支える情報発信事業」、「はじめてのおしばい～心豊かに育つには～」、「多胎家庭を妊娠期から継続的に支え、虐待を防ぐ活動」の4事業が実施される等、コロナ禍でも事業内容を大幅に変更することなく、適切なタイミングでの支援を確認することができました。

## 【プロセス評価】

自治会活動においては、地域活動に取り組む自治会を支援することで地域コミュニティ全体の活動の活性化に寄与しました。

## 【課題・今後の方向性】

自治会員の減少や高齢化等により自治会を取り巻く環境は大変厳しくなっており、自治会への支援は大きな課題です。また、活躍の場の創出としては、市内社会福祉法人との連携（ふくしネットたちかわ）により重層的支援体制整備事業での参加支援の取組が始まっており、今後この連携が重要になってくるものと思われます。

## ③ 地域福祉、地域活動の担い手（リーダーやコーディネーター）の発掘や支援ができたか

地域や社会のさまざまな課題解決に向けた市民活動を支援する基盤が整備され、たくさんの市民が自主的・自発的に地域活動に取り組んでいる。

【「地域福祉、地域活動の担い手（リーダーやコーディネーター）の発掘や支援ができたか」に関する主な取組】

1-2 ボランティア・市民活動センターの機能強化（市民協働）、2-4 生涯学習市民リーダーの育成（生涯学習推進センター）、3-1 相談支援包括化推進員の配置（地域福祉）、3-6 権利擁護の推進（福祉総務、高齢福祉、障害福祉）、3-9 高齢者、障害者、児童等の虐待防止（高齢福祉、障害福祉、子ども家庭支援センター）、3-10 民生委員・児童委員による地域の見守り、相談支援（福祉総務）、4-1 地域の安全・安心の推進（生活安全、子ども育成）、4-2 地域防災の推進（防災、福祉総務、各課）、6-1 各種相談窓口での情報提供（人事、各課）、6-2 市報とホームページ・SNS等による情報発信（広報、各課）、6-3 各種情報誌の発行（福祉総務、介護保険、子ども家庭支援センター、各課）、6-4 図書館でのハンディキャップサービス（図書館）、7-3 地域懇談会の開催（地域福祉）

## 【量的評価】：C

令和4年度より、市に1人、社協に2人の「相談支援包括化推進員」を配置し、複合化・複雑化した課題に対応していくため、関係機関、専門職等との連携体制を強化し、支援者支援ということも念頭に置き活動しています。令和4年11月30日時点での相談件数は110件でした。地域福祉コーディネーターは令和4年度より各地区2名体制、合計12名に増員され、地域づくりが推進されています。ただ、コロナ禍で地域人材の育成が滞り令和4年の民生委員の改選で例年より多くの欠員地区が生じるなど量的評価としてはC評価となりました。

## 【質的評価】

民生委員・児童委員による地域の見守り、相談支援では、コロナ禍の影響で定期総会の書面開催等、活動にも大きな影響を及ぼしましたが、令和3年度においては、会長協議会や地区定例会は、ほぼ例年通りの回数を開催することができ、民生委員・児童委員間の連携体制は維持することができました。

## 【プロセス評価】

「市民リーダー」においては、令和3年度団体企画型講座や展示会へ903人の参加があり、延べ82人の生涯学習指導協力員である「市民リーダー」が講師として活躍しました。「成年後見制度」においては、市民後見人登録者が実際に初めて後見人を受任しました。地域連携ネットワークの中核機関を設置し、成年後見事業を令和4年度から、「地域あんしんセンターたちかわ」への市の委託事業とし、主体と責任を明確化しました。

また、地区ごとに開催した年2回の避難所運営連絡会を通して、各地域版防災マップの更新や避難所運営マニュアルの修正を行うとともに避難所運営組織の継続的支援を行い、避難所運営組織の防災力向上につなげました。

## 【課題・今後の方向性】

コロナ禍で滞った地域人材の育成が課題になります。災害時に地域のつながりが有効に機能するためには、平常時から地域のつながりを意識した取組が重要になってくると考えられます。

**④ 地域住民と関係機関の連携・協働は進んだか**

フォーマルサービスとインフォーマルサポートが連動しており、必要に応じて連携できる体制が整っている。また、狭義の福祉領域だけで完結せず、関係諸領域が相互に連続性を保っている。

**【「地域住民と関係機関の連携・協働は進んだか」に関する主な取組】**

1-5 各種事業でのボランティア活動の支援（各課）、3-2 総合的な相談支援（高齢福祉、地域福祉）、3-3 行政内部の連携体制強化（地域福祉、各課）、3-4 障害者に対する相談支援（障害福祉）、3-5 生活困窮者の自立支援（生活福祉）、3-7 住宅確保の支援（高齢福祉、障害福祉、生活福祉、地域福祉、住宅）、3-8 各種ネットワークの構築（高齢福祉、障害福祉、子ども育成、福祉総務、産業振興、まちづくり推進、各課）、3-11 子ども、家庭に関する相談（子ども家庭支援センター、健康推進）、3-12 各種相談の実施（男女平等参画、生活安全、教育支援、指導、健康推進、各課）、5-1 孤立防止を目的とした外出支援（地域福祉、福祉総務、交通対策、各課）、5-3 建築物、歩道等のバリアフリー化推進（福祉総務、道路）、5-5 障害者に対する理解促進（障害福祉、生涯学習推進センター）、8-3 再犯防止のための連携体制づくり（福祉総務）

**【量的評価】：C**

地域包括支援センター等での総合相談件数は25,124件と多くの相談が寄せられていますが、やはりコロナの影響で困難ケースは増加し、重層的支援体制整備事業を通してインフォーマルサポートとも連動した解決するしくみの構築が必要なことから量的評価としてはC評価となりました。

**【質的評価】**

立川市では、令和4年度より重層的支援体制整備事業を実施し、庁内外の関係機関と連携し、課題解決を図っています。相談の重点取組対象者を「ひきこもり」、「ヤングケアラー」、「ポストコロナの生活困窮者」としました。

**【プロセス評価】**

地域包括支援センターを中心に、地域福祉コーディネーター等と連携し、日常生活圏域の特性を活かしながら、地域課題を抽出し、課題解決に向けて取り組みました。令和3年度は総合相談件数（包括等）25,124件、相談者数（包括等）30,613人、ネットワーク構築のための地域活動（包括等）1,252件でした。

**【課題・今後の方向性】**

相談の中でも「ひきこもり」等生きづらさを抱える子ども・若者に対しては、ネットワークの力を活用した支援が求められており、庁内関係部署や地域資源やキーパーソンとの連携に取り組んでいく必要があります。さらに、コロナ禍でDV・虐待等を含めた支援を要する困難ケースは増加傾向にあり、個々の担当だけでは対応しきれない場合が多く、早期発見、早期支援、家庭支援、そして適切な支援のためにも関係機関との連携が必要です。

上記の課題とともに、住宅確保の支援については、令和3年度居住支援協議会を設立しましたが課題が多岐にわたり複合的であるため、不動産協力店や関係団体との支援ネットワークの拡充を図る必要があります。孤立防止を目的とした市民の外出支援に関しては、福祉等の視点を含めた支援のあり方を検討する必要があります。また、自殺対策としての孤立防止対策の検討が課題となり、連携を行っていくことが求められています。

**【総括】**

新型コロナの影響で地域のつながりの希薄化が進み、孤立を望まない方の孤立防止が大きな課題となっています。その視点からの振り返りを重視しております。

**【委員意見】**

地域人材は眠っている人材も含めて豊富、いかに発掘するかが大事。地域活動している人材をすぐ団体等につなぐのではなく、徐々に適切につなげることが大切。コロナ渦で学生の孤立化がみられる。学校単位でなく同年代や地域のつながりをつくり、その中から人材発掘を試みてはどうか。



## 1 まるごと相談支援

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	相談窓口が増える	相談支援機関との連携事例を増やしていく。 「地域福祉アンテナショップ」を増やすことで、地域福祉コーディネーターなどを通して、地域で身近に相談支援できるようにするとともに既存の相談機関から相談支援包括化推進員に繋いで頂くことや一緒に世帯支援をすることで、相談を繋ぐ入口が増えることになる。 実際に相談機関と連携して対応することで、相談機関が連携のイメージをつかむことができ、安心して繋いでもらえるようになる。	既存の相談機関からも一部あがっているが、「どういケースの場合に繋いでよいかわからない」という声がある。 ケースの積み上げ中なので、まずは迷ったものは相談いただくように案内しているが、断らずまるごと受ける相談体制を維持するためには、既存相談機関にどこまで担ってもらうのか明確にしていく必要がある。	相談支援のケース分析を行い、直接相談支援を行うものや支援者支援のものなど、事例を出していくとともに、支援者支援を重ねることで、相談支援機関のスキルアップにも繋がれるように取り組んでいく。
2	あらゆる相談を受け止める組織が整備される	多くの相談を受ける中で、「相談を受け止めじっくり話を伺うこと」「信頼してもらえるよう時間をかけて関係性を作ることを常に心掛け、定着しつつある。また、関係機関と役割分担し、支援方針を立てていくために、庁内連携会議や各分野のネットワーク会議での各機関との関係性づくりにより、必要に応じて相談できる体制を構築している。	相談解決のためには、サービス提供等の支援策を組み合わせ、ない支援は創設し、課題解決型の支援を充実させていくとともに、伴走により相談者自身が力を取り戻していく支援を両輪として、2つのアプローチを組み合わせることで効果的に支援していくことが求められている。この伴走支援という考えがまだ浸透していないところがある。サービス提供等の支援策がないときに「ここでは支援できません」ではなく、「伴走＝寄り添い」の気持ちを持って相談を繋いでいき、ライフステージの変化などに応じて、柔軟な支援をしていくことが求められている。	既存の「サービスありき」の支援では限界が来ていること、「伴走支援」が必要であることやその方法について、行政や市内支援機関と共に学び、広めていけるよう取り組んでいく。
3	相談しやすく安心できる環境が整備される	来庁相談や電話相談、必要に応じて自宅訪問や自宅付近での行政施設での面談など、相談者の状況に応じた相談環境を心掛けている。	相談者と支援者という関係性だけでなく、フラットな関係で(ピアカウンセリングのような)話ができるような場が不足している。安心して「そこにいても良い」という場が増えていく必要がある。また、対面でないオンラインを活用した支援も求められている。近隣の市町村と協議し、広域での対応も視野に入れる必要がある。	個別の相談支援から相談者の傾向や力を見つつ、地域福祉コーディネーターと連携しながら、1対多数のコミュニケーションの(お互いに相談したりされたりできるような)場を作っていけるよう検討する。メタバースを含むオンライン活用とともに、近隣市町村との協働による広域での対応も検討していく。

## ■総括

相談支援機関との連携やそれによる相談支援の実施は着実に進んできている。しかしながら、「伴走支援」の必要性和普及はまだこれからであり、支援者に新たな手法として定着するまでには時間がかかると思われる。また、相談することで即解決するのではなく、相談者自身と支援者が一緒に考える場であったり複数の相談者が互いに相談し合える機会の提供も今後は必要になってくると思われ、近隣市とも連携しながら取り組んで行く必要がある。

## ■意見をいただきたいポイント

支援者をはじめ、多くの市民に対し「伴走支援」への理解とご協力をいただくために、どういった普及啓発の手法が効果的か。

## ■委員からの意見

「伴走支援」の具体的な在り方について市民に呼びかけることが大事。まるごと相談支援は、「出口」があることが大事なので、参加支援が喫緊の課題ではないか。  
実際に「伴走支援」をしている人はすでにいるので伴走支援している人を増やしていくことが重要。伴走支援の具体例や相談者がどのような相談支援機関につながっているのかを見える化して普及啓発を図っていくのはどうか。

## 2 地域福祉コーディネーターの活動強化

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	住民同士が緩やかにつながる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域福祉コーディネーター(生活支援コーディネーター兼務)の各地区複数配置の実現(2022年4月～)</li> <li>・サロン活動の運営継続のための支援</li> <li>・地域福祉アンテナショップを拠点とした、多様な活動の展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染対策と社会参加との両立が難しい活動があり、閉じこもりになりがちな高齢者が増加した</li> <li>・本人がつながりを求めても、家族や親族の意向により行動を制限される方がいた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンライン化が進むことにより、不利益(必要な情報を受け取れない、活動に参加できないなど)を被る市民が生まれないよう、必要なサポートを行う</li> <li>・地域福祉アンテナショップが安定した体制で運営できるよう、協働者を増やせる働きかけを行う</li> </ul>
2	地域住民がいつでも気軽に相談することができる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域福祉コーディネーター(生活支援コーディネーター兼務)の各地区複数配置の実現(2022年4月～)</li> <li>・地域福祉アンテナショップの設置開始(2022年5月～)</li> <li>・ふくしネットたちかわ(立川市地域貢献活動推進ネットワーク)を中心とした社会福祉法人の連携強化の推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域福祉アンテナショップが身近な困りごとを相談できる場であることの周知が不足している</li> <li>「住民が住民の相談を受ける」ことに対する認識の不一致が露呈された</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談を受けることのできる体制(人員の配置や場の確保)の強化をすすめる</li> <li>・社会福祉法人と住民の結びつきを、圏域レベルで強化できるよう、圏域ごとの懇談会の開催を推進していく</li> </ul>
3	地域住民が生き生きと自分を表現できる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域福祉アンテナショップの運営に、住民が主体的にかかわれる雰囲気の醸成</li> <li>・「やってみたい」をバックアップする社会資源(ヒト・モノ・カネ)の確保</li> <li>・参加支援の実現に向けた、各種団体(社会福祉法人、商店、企業等)との連携・協働</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動場所になりうる物的拠点の確保に苦慮する地域がある</li> <li>・オンラインとの併用がまだ馴染まない活動への対策に着手できていない</li> <li>・各種団体への参加支援についての理解や、周知がまだまだ不足している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生涯学習推進センター等の機関と連携し、技能を持つ人材の情報を共有することで活動の裾野を広げていく</li> <li>・市内事業所が展開する「空き家活用」に関する事業と連携し、物的拠点の確保に努める</li> <li>・参加支援を下支えする支援団体のほか、ひきこもりなど参加が難しい方への伴走型のボランティア養成・育成について継続検討していく</li> </ul>

## ■総括

令和4年度より地域福祉コーディネーターの増員(各地区2名配置)が実現したことで、今まで着手できなかった地域課題の発掘や課題発見に取り組むことができた。新型コロナの感染拡大状況が不透明な中で地域活動は活動者・支援者ともにそれぞれが葛藤を抱えているが、全国の先進的事例も参考に、つながりを切らさない支援を絶えず検討していく

## ■意見をいただきたいポイント

・地域福祉コーディネーターの役割の可視化に必要な具体的アクション

## ■委員からの意見

- ・地域福祉コーディネーターがどのような人や団体と協働しているのか、どのようなつながりで活動しているのか、関係の相関がわかるよう図式化してほしい
- ・各地域ごとに上記つながりの図式化を進めてほしい
- ・地域にある社会資源を見える化する際は住民を巻き込んで行うことにより意識化できる
- ・会議等の場では今まで以上に積極的に役割をPRする。また、参加する会議の内容と自分の活動を紐づけて発言していくことが必要



3 地域福祉アンテナショップの設置【第1地区】(富士見、柴崎町)

資料 2

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	身近な場所でふらっと立ち寄れる場所が増える	<p>○新規開拓に向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域回りを行い空きスペースや使用できそうな建物はないか確認を行った</li> <li>・企業へのプレゼンテーションや、小地域ケア会議等でアンテナショップについて説明を行った</li> <li>・第1地区内立川市社会福祉法人地域貢献活動推進ネットワーク参加法人へアンテナショップの説明・ヒアリングを行った</li> <li>・実際に居場所の開催を行っている団体やお店へヒアリング調査、アンテナショップの提案を行った</li> <li>・アンテナショップを目指す団体の活動・運営支援を行っている</li> </ul> <p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <p>子育てを軸に地域の方が緩やかにつながることができる居場所を開催中。立ち上げに向け、子ども関係の団体、自治会、民生委員、子ども会連合会、老人会等と懇談会を開催。現在もスタッフミーティングを行いながら活動を行っている。参加者は自由に過ごす場であり、おもちゃで遊ぶ子どもや見守る大人、おしゃべりを楽しんでいる方等過ごし方は自由である。</p> <p>○カフェユルク</p> <p>子ども～大人まで多世代が緩やかにつながる居場所をつくりたいと相談を受け、週2回居場所カフェをオープンした。現在、運営相談・広報支援を行っている。</p>	<p>○新規開拓に向けた取り組み</p> <p>地域福祉アンテナショップに認定されたことで、「地域から信頼が得られた」という意見を受ける半面、地域福祉アンテナショップの名前がつくことに対してプレッシャーに感じてしまう方もいることが分かった。地域福祉アンテナショップを身近に感じてもらえるようなチラシやアンテナショップの説明資料の必要性を感じる。</p> <p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <p>現在代表者を中心に活動が行われているが、今後継続する為には運営スタッフの人材確保が必要。また、資金面では助成金を活用して保険代や活動費を賄っている。立ち上げ当初は資金調達に苦戦し、保険をかけることができず不安がある中で活動を行っていた。資金調達の仕組みづくりや助成金の申請等今後も引き続き検討していく必要がある。</p> <p>○カフェユルク</p> <p>地域への周知を広げる必要がある(民家の一角に位置するため、近隣住民への理解を広げる)</p>	<p>○新規開拓に向けた取り組み</p> <p>既存の活動団体や企業の地域貢献活動等を再度確認し、地域福祉アンテナショップへの協力依頼・検討を行う。</p> <p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <p>スタッフの負担が大きくならぬよう無理なく運営する。基本的には居場所を開くことに特化。スタッフの余力が出たときにイベント等の開催を検討していく予定。広報活動を強化し、子育て世代だけでなく様々な世代が参加しやすい・活躍できる場を目指す。</p> <p>○カフェユルク</p> <p>・住民から相談があった場合は地域福祉コーディネーター、ふじみ地域包括支援センター等につなぐ等連携していく。また、民生委員や地域住民と連携しながらシニア世代が活躍できる居場所づくりを検討していく。</p> <p>・世代を問わず誰でもふらっと立ち寄れる場を提供する</p>
2	相談や交流、活動の場が広がる	<p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <p>子どもを連れてきた親御さん同士や、子ども同士自然と会話が生み出されている様子が伺える。団体には社会福祉士・保育士等専門職もあり、何か心配ごとがあった際相談できる関係づくりを目指している。また、大人のみ100円で飲み物を提供している為お茶をしながら会話を楽しんでいる。</p> <p>○カフェユルク</p> <p>カフェにお客さんとしてきた方同士会話が生まれている。店主が子どもたちへ昔遊びを教えており、ボランティアがガレージで絵本の読み聞かせを行っている。</p>	<p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子育てを軸とした居場所な為、子育て世代以外の関心が少ない</li> <li>・広報活動の強化(チラシの配布等地域の協力が必要)</li> <li>・運営をサポートしてくれる人材の確保</li> </ul> <p>○カフェユルク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・広報活動の強化</li> <li>・住民への理解啓発</li> </ul>	<p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域に根付いた活動となるよう居場所を開催しながら、主体的に参加できるスタッフを探す</li> <li>・運営スタッフを当番制にする等仕組みづくりを行う</li> <li>・周知を広げる</li> </ul> <p>○カフェユルク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・店内/庭/ガレージを開放し、地域の交流スペースとして活用しながら、場所の周知を広げる</li> </ul>
3	個人の思いに仲間が募る、協働者が増える	<p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・懇談会を定期開催し、運営方法について検討している。団体立ち上げ時、住民団体・自治会・民生委員・学生ボランティア・子ども会連合会・老人会等へ協力の依頼を行った。現在、SNSやチラシ・社協広報紙等を活用し、広報活動を行っている。</li> <li>・学習支援や音楽演奏ボランティア等受け入れを行った</li> </ul> <p>○カフェユルク</p> <p>カフェとして毎週営業しつつ、バザーの開催や夏祭り等イベントの開催を行った。「ユルク」便りを毎月発行し活動報告、イベントの周知等を行っている。</p>	<p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SNSと紙媒体の広報をより効果的に活用していく必要がある。公式LINEで情報発信を行っているが、現在の参加者は人伝えが多く、地域のネットワークの重要性を感じている。</li> </ul> <p>○カフェユルク</p> <p>住宅街の一角で場所が分かりづらい。SNSや紙媒体等を使用し、住民への周知を広げる必要がある。</p>	<p>○ふじみ町みんなのおうち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・LINE/Instagram/チラシの配布等広報活動の強化</li> </ul> <p>○カフェユルク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップやイベントの開催</li> <li>・広報活動の強化</li> </ul>

3 地域福祉アンテナショップの設置【第2地区】(錦、羽衣町)

資料 2

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	身近な場所でふらっと立ち寄れる場所が増える	<p>○はねきんのかい(全部型候補) トワイライトステイ: 毎週(月)、地域の気になるお子さんの夕方から夜間の居場所づくりに取り組んでいる。子連や主任児童委員をはじめとした地域の協力者と、大学生のボランティアと実施。最近、卒業した中学生が「あかりがついていたら」と、ふと立ち寄り、愚痴も含めた近況を話してくれたこともあった。子どもにとって、何かあった時に立ち寄れる場所として、地域に根付いていることを実感する出来事だった。</p> <p>若者就労支援プロジェクト: 至誠学園より「児童養護施設には、能力的な問題はないにも関わらず、はたらくことに難しさがある子どもがいる」との話があった。そのことを受けて、はたらくことや自分の将来に目を向ける意識づけを目的に、地域の企業・商店の協力を得て、高校生を主な対象とした、おしごと見学&amp;ミニ体験会を実施した。ごく少数人数での実施であったが、参加者の満足度は高く、次回に向けた前向きかつ具体的な要望も聞くことができた。</p> <p>○三多摩健康友の会との地域交流の場づくり(協働型候補) 会員に限らず、地域の方に向けて何かできることはないかと思いがあつた中で、協働型アンテナショップについて知ったとのことで、2022年10月にCoに問合せがあった。会の主要メンバー4名と、具体的な取り組みに向けて、方針を検討中。</p>	<p>○はねきんのかい トワイライトステイ: 大学生ボランティアの確保が一定周期(卒業のタイミング)で課題となってくる。児童相談所や子ども家庭支援センターが介入しているケースもあり、それら機関や、学童、地域のネットワークといった幅広い協働先と、適宜情報交換しながら運営していく必要がある。錦町から、子ども一人で通ってくるのが難しく、利用につなげられないケースも出てきている。</p> <p>若者就労支援プロジェクト: 第1弾は、職親的な関係も期待できるアルバイト先、就職先の開拓も視野に、地元密着で企画した。しかし、若者の興味関心、本人の得意なこと、特性に応じたはたらき方・しごと探しのお手伝いという点では、市内全域での展開の必要性も感じた。</p> <p>○三多摩健康友の会との地域交流の場づくり 取り組みの具体化にあたっては、組織の同意が得られる内容である必要がある。また、主要メンバーの興味関心が多岐にわたり、協力の可能性がある組織のネットワークも広い。まずは方向性を定めていくことが必要。</p>	<p>○はねきんのかい トワイライトステイ: 小学生までは食事づくり、銭湯なので生活支援でつながることができると対象を中学生にしたとき内容をもう工夫する必要がある。家に居場所がないと思う生徒はつながるが、気軽にだれでも好きなときに立ち寄る居場所はやはりゲームなのか。ターゲットについて再検討が必要。</p> <p>若者就労支援プロジェクト: 参加者からは、「IT企業など、一部業界に特化した内容でも良い」と「福祉に関心がある」、「バイトでは経験できない業種・業界の見学や体験ができると良い」といった感想があつた。意見を反映した形で、第2弾を検討していきたい。今後の開催にあたっては、他の児童養護施設にも参加を呼びかけ、少しずつ裾野を広げていきたい。</p> <p>○三多摩健康友の会との地域交流の場づくり アンテナショップの先行事例の見学を予定している。それらを参考に、会としてやってみたいこと、できそうなことを協議してもらったためのサポートをしていく。</p>
2	相談や交流、活動の場が広がる	<p>○はねきんのかい まちなつとかふえ「よろず相談」 4つの市民活動団体が、それぞれの会の特徴を生かしたよろず相談室を、毎週(木)に週替わりで開設している。今年度は、近隣への周知を広げようとして「1日オープンイベント」を開催し、手作り品や野菜の販売、エンディングノート記入会などを実施した。</p> <p>○錦町子どもの居場所懇談会 2022年9月8日、子ども若者自立支援ネットワークの研修に、ネットワークに属さない地域の方も招き、各エリアで設定した地域課題について懇談会を実施した。錦町では「子どもの居場所づくり」を取り上げ、当日終了後も地域に持ち帰る形で、月1度のペースで協議を継続(錦町子どもの居場所懇談会)。まずは第一弾の企画実施に向けて、準備を進めている。(2023年1月21日実施予定)</p>	<p>○はねきんのかい まちなつとかふえ「よろず相談」 週に寄っては、参加者が伸び悩んでいる。この点を打開するための、右記「1日オープンイベント」であったが、純粋な新規参加者は、期待程多くなかったという意見もあつた。</p> <p>○錦町子どもの居場所懇談会 第二弾、第三弾と打っていく中で、地域の「気になる子ども」とどうつながっていくかが課題。居場所が必要な子どもの参加に結びつく、協力先との連携、人材の確保、企画内容の検討が必要。また、取り組みの継続と、いずれは常設化(あるいはそれに近い形で定期化)を模索するうえで、場所の確保が急務。</p>	<p>○はねきんのかい まちなつとかふえ「よろず相談」 関係者は企画の開催に前向きで、今後も折々で実施していくと思われる。周知への協力が期待できるネットワークとつながること、サポートしていきたい(羽衣町支部の自治連とはお引合せ済)</p> <p>○錦町子どもの居場所懇談会 会の目的は「子どもが安心して、のびのび過ごせる居場所づくり」を錦町で進めていくこと。当面、地域の気になる子どもと、つながるきっかけづくりとして、企画を継続的に開催していく方針。その中でアンテナショップ化も視野に、常設化(あるいはそれに近い形で定期化)の可能性を模索していく。Coとしては、左記に上げた「人材の確保」という点で、「あの人がいるなら、行ってみようかな」と子どもが思えるような大人、若者との関わりをつくっていきたい。関連テーマの学習会を、関係者・地域住民と検討していくのも一案。</p>
3	個人の思いに仲間が募る、協働者が増える	<p>○はねきんのかい サロン/サークル活動の立ち上げ ミンシンの寄付を受けたこともあり、はねきんで活動する既存のサロンのネットワークで人が集まり、ミンシンの会が立ち上がった。また、ピアノの寄付を受けたこととピアノ講師にネットワークがある関係者がいたことで、シニア世代を中心としたピアノの会が立ち上がった。</p>	<p>○はねきんのかい サロン/サークル活動の立ち上げ 趣味や特技、関心ごとを介して集まったメンバーを、いかに地域活動に巻き込んでいくかが課題。</p>	<p>○はねきんのかい サロン/サークル活動の立ち上げ 直近の取り組みとして、ミンシンの会のメンバーの協力を得て、子育て世代を対象に、入学グッズ作成会(上履き入れや給食袋などの巾着類)の準備を進めている。対象者は保育園か幼稚園か、その場合時間帯は、準備物は何かが必要かなど、準備・段取りに関する相談には主体的に応じてくださっている。このような形で、各サロン/サークルとの協働による地域活動を、意識的に展開していきたい。</p>

3 地域福祉アンテナショップの設置【第3地区】(曙、高松、緑町)

資料 2

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	身近な場所でふらっと立ち寄れる場所が増える	<ul style="list-style-type: none"> <li>立川駅近隣のマンションにおいて、孤立化が進む現状に対し、マンションの集会所を拠点とした活動をスタート</li> <li>社会福祉法人の施設の一部を活用し、地域に開かれた活動拠点として運用を開始。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>駅付近は人も多く、交通アクセスもいいが、ある程度の人数を収容できる会場の確保が難しい</li> <li>マンションの集会室は空室が目立ち、活動拠点として可能性を秘めているが、オートロックのため、開場のために人員を割く必要がある</li> <li>一方で、他の居住者からは防犯面で理解を得られないパターンもある。活動を広げることと、居住者のプライバシーを守るバランスが必要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>企業や商業施設が充実している特性を生かし、新規活動場所の開拓を進めていく</li> <li>自治会館も点在しているが、現状そこまで活用は進んでいない印象。当該自治会員の方も巻き込みながら、試験的にでも活用できるよう交渉していく</li> </ul>
2	相談や交流、活動の場が広がる	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域福祉コーディネーター、民生委員が常時活動に参加することで、気軽に相談できる体制を整備した</li> <li>参加者同士の親睦が深まり、活動以外にも自宅を行き来するような交流が生まれた</li> <li>体験企画として実施したスポーツや娯楽活動を、「自分のマンションの集会所でもやってみたい」として新たな活動に派生している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規参加者数が伸び悩んでいる</li> <li>場としては開かれているものの、参加者がいわば「お客様」の姿勢で来られることが多く、活動のマンネリ化が懸念される</li> <li>子育て世代、現役世代の参加には、休日の開催が望ましいが、現状運営のためのマンパワーを割くことが難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>包括支援センター、学習館、児童館等の関連機関と連携を深め、積極的な広報を展開する</li> <li>呼びかけをする人自身が自身のエピソードとして活動場所を宣伝できるよう、より多くの方に参加していただけるよう周知を進める</li> <li>ふくしネットたちかわのつながりを生かし、利用者が交流できるような仕組みを整備していく</li> </ul>
3	個人の思いに仲間が募る、協働者が増える	<ul style="list-style-type: none"> <li>企画運営には当該マンションの住民にメンバーとして入ってもらい、口コミによる広報を依頼。</li> <li>定例の活動が固まっていない柔軟性を生かし、住民による持ち込み企画が展開されている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>柔軟に活動を展開できる「場」としての周知が不足している</li> <li>場の雰囲気や行っていることを参加者自身で伝えていくことが難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>企画運営に携わる地域住民を増やしていくことで、より開かれた活動、および住民の主体性を生かした活動を展開していく</li> </ul>

3 地域福祉アンテナショップの設置【第4地区】(栄、若葉町)

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	身近な場所でふらっと立ち寄れる場所が増える	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉的要素がでないよう、オシャレさを維持し、老若男女様々な方が利用できるよう心がけている(特に音楽・芸術に関心のある方の活躍の場に入れている)</li> <li>・「利用方法が分からない」という声に対応し、黒板を購入し、利用方法を掲示した</li> <li>・初めての方が入りやすいよう定期的にイベントを開催している(自治会と協働のフリーマーケット、夏祭り縁日、季節ごとのコンサート、1周年記念パーティ等)</li> </ul> <p>○協働型立上げに向けた取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な運営主体の発掘に向けた説明会の実施(まちねっとで広報)</li> <li>・説明会への出席はなかったものの「まちねっと」を見た事業所より連絡を受けたり、行政が案内をする際に活用していただけた</li> </ul>	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「何をしているか分からない」「運営主体が分からない(怪しい)」という声がある</li> <li>・地域福祉アンテナショップの説明を掲示することで、福祉的要素が強くなってしまい、一般の方の利用が減ることが心配</li> <li>・固定の利用者が増えたことで、新たな人が入りづらい雰囲気になっている</li> <li>・行政からの予算がなくなった後の自己財源(特に家賃)の確保</li> </ul> <p>○協働型立上げに向けた取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉事業所、薬局、企業、専門学校、福祉相談センターへ説明を行ったが、こちらから提供できる資金がないため、事業所が来年度に向けて事業化・予算化を計る必要がある。そのため、立ち上げに時間がかかってしまう</li> <li>・地域福祉アンテナショップの概念・利点(貢献的なイメージしかない)を伝えることが難しい(イメージしづらい)</li> </ul>	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな利用者(課題のある人もない人も)や運営者(店番・実行委員)を増やすために、土日や夜間も開所していく</li> </ul> <p>○協働型立上げに向けた取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・説明を行った事業所等へ、2月くらいに進捗を確認する</li> <li>・協働型アンテナショップの営業を継続する</li> </ul>
2	相談や交流、活動の場が広がる	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅で音が出せない方がピアノやギターを弾きに来る場面があった(在宅勤務、不登校の生徒等も)</li> <li>・レンタルボックスの利用や音楽をきっかけに、店番ボランティアになった方がいる</li> <li>・美大の学生へ声をかけ、無料で会場を貸し出した。販売も可能とし、展示会期間中の店番は学生に任せた。口コミで新たなグループが展示を希望している</li> <li>・ほ一かつカフェやくらしの保健室等、専門職による企画を実施した</li> <li>・利用者が自由に記入できるノートによる交流を促している</li> <li>・日頃交わることの少ない世代向けにSNS(Instagram・YouTube)による発信をしている。グーグルにも登録をした</li> <li>・店番ボランティアが記入する日報による情報共有をしている</li> <li>・子どもが来やすいよう、駄菓子販売や子ども110番への登録を行った</li> </ul> <p>○協働型立上げに向けた取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域貢献の意識の高い薬局やデイサービスへ説明をした</li> </ul>	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実行委員会として団体の貸切りを認めていないため、不登校の子どもの居場所や認知症カフェのような、ターゲットを絞った企画が成功しにくい(テーマによる多世代の集まりが有効)</li> <li>・コロナ禍で食をテーマにした企画ができていない。また、持ち込みの飲食についても店番ボランティアによってはリスクを気にするあまり、利用者へ注意してしまう場面がみられる</li> <li>・トワイライトステイができるよう、お風呂を作ってもらったが、開所中の入浴は難しく、設備を活かしきれていない</li> </ul>	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・困りごと(孤食や学習等)やテーマ(芸術)を軸にした世代に捉われない企画を行うことで、出会い・交流・支えあいをすすめていく</li> </ul> <p>○協働型立上げに向けた取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小地域ケア会議や事業所連絡会等、高齢分野のネットワーク会議を活用した営業活動を行っていく</li> </ul>
3	個人の思いに仲間が募る、協働者が増える	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就労支援B型事業所によるコーヒーを週1回提供することで、障害のある方も入りやすい環境づくりを行っている(就労の場の提供)</li> <li>・音楽好きな人が集まる仕掛けをしている(ピアノ・ギターの設置、演奏会等)</li> <li>・フリーWi-Fiによる在宅勤務者等に活用してもらおう仕掛け</li> <li>・駄菓子の販売や縁日等、子どもたちを呼び込む仕掛け</li> <li>・レンタルボックスによる特技を披露・販売する仕掛け</li> <li>・近隣大学への広報し、利用を促している</li> <li>・実行委員会により運営している</li> <li>・キャスト(店番ボランティア)の懇談会を実施することで、キャスト同士の交流・情報交換の機会を設けている</li> </ul>	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実行委員が固定化している。また、298へ顔を出す機会の少ない実行委員もいる</li> <li>・放課後、児童・学生が利用しやすい時間帯ではない</li> <li>・おしゃべりする高齢者が多いため、常時、在宅勤務や学生が静かに勉強できる環境ではない</li> <li>・フリーWi-Fiがあっても、社会人が帰宅してから利用できる時間帯に開けられていない</li> </ul>	<p>○全部型(BASE☆298)の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・行っていることを継続していく</li> <li>・常設するアイフォンからInstagramをアップできるように、店番ボランティア・実行委員へ方法を伝えていく</li> <li>・開所の時間帯を増やすことで、日頃から運営に関わるころができる実行委員を増やす</li> <li>・実行委員だけでなく、キャスト企画のイベントを取り入れていく</li> </ul>

3 地域福祉アンテナショップの設置【第5地区】(幸、砂川、柏、泉町)

資料 2

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	身近な場所でふらっと立ち寄れる場所が増える	<p>○食べて元気いっぱいプロジェクト 多世代の居場所づくりを目的に住民グループ、包括、地域福祉コーディネーターの3者協働で取り組んでいる。高齢化している集合住宅でのお弁当無料配布や食品パントリーを経てだれでも食堂の実施につながった。場所は地域住民にも周知され、だれでも食堂が回数を重ねていくことで地域に根差した活動となり、多世代が集い、交流できる身近な居場所となりつつある。3者協働で実施している利点もあり気軽に相談できる雰囲気を持っている。これまでの活動状況や地域性からもこの場が地域アンテナショップとして機能する可能性が高く全部型の設置の方向となっている</p>	<p>○アンテナショップ開設に向けて ・運営主体として実行委員会の立ち上げと機能強化 ・地域住民への周知、広報 ・関係機関との協働</p>	<p>・アンテナショップの設置、運営に向けての準備を進める ・この地域ならではの地域性や農業と連携した取り組みや場づくり ・住民、包括、地域福祉コーディネーター3者協働の強みを生かした運営を模索していく</p>
2	相談や交流、活動の場が広がる	<p>○みんなのサードプレイス「ゆるりら」 不登校のお子さん子育て中の保護者が安心して参加できる居場所となるよう当事者の会として活動。同じ悩みをもつ保護者同士や同じ経験のある先輩ママとの交流を行う。現在は、子どもたちの学校以外の居場所としての活動も行っている</p> <p>○柏ふれんど(柏町子どもの居場所づくり懇談会) 青少健柏町地区委員会を中心に子どもに関する活動をされている方が参加され活動がスタート。定期的に懇談会を開催し地域での取組みや気になる子どもについての情報交換を行う。具体的な活動として気になる子どもを対象にトワイライトステイを実施。その後、土曜日の居場所として柏町ドライブを実施している。2022年10月任意団体として柏ふれんどを発足し活動の基盤固めを行った。気になる子どもの状況に合わせた居場所づくりを柔軟に行っている</p> <p>○ボランティア活動の場の提供 コロナ渦でボランティア活動の場が減少。だれでも食堂と協働していくことで地域交流と合わせてボランティアの活躍の場を提供している。だれでも食堂と絵本の読み聞かせグループの活動等</p>	<p>○みんなのサードプレイス「ゆるりら」 ・場の継続。参加保護者の置かれている状況は様々で複雑なため、場の継続が難しい ・他地域での新たな会の立ち上げ ・広報、周知をどうしていくか。必要な方に必要な情報を届ける方法について検討が必要</p> <p>○柏ふれんど ・関係機関との協働、ニーズの掘り起し ・学生ボランティアの確保 ・場の確保(公共施設に限らない場の確保も検討) ・学校との関係づくり ・運営資金の確保</p>	<p>○みんなのサードプレイス「ゆるりら」 ・地域ごとの会の立ち上げ</p> <p>○柏ふれんど ・関係機関と協働しながらニーズの掘り起しをし、子どもたちに必要な居場所の提供を行っていく</p>
3	個人の思いに仲間が募る、協働者が増える	<p>○支えあいサロンの立ち上げや運営支援 個人所有の集合住宅の1室を地域の居場所にしたとの相談を受ける。音楽のある場所として支えあいサロンを立ち上げた。新たなサロンとして活動がスタート</p>	<p>・砂川学習館の改修工事に伴う活動場所の減少 ・公共施設に限らない場の確保 ・支えあいサロンの数に地域差がある ・介護保険と併用した参加についての相談が多いが、歩いて行かれる身近なサロンについて地域差がある ・世話人、参加者共に高齢化が激しく運営支援が必要なサロンが多い</p>	<p>・歩いて行くことができる身近な支えあいサロンの設置 ・高齢者化している支えあいサロンの運営支援を通じて、支援が必要な人の発掘</p>

3 地域福祉アンテナショップの設置【第6地区】(上砂、一番、西砂町)

資料 2

No.	目標	取り組んできたこと(具体的な取り組み)	課題	今後の方向性
1	身近な場所であらう立ち寄れる場所が増える	<p>○全部型(にこにこサロン)の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度よりにこにこサロンが正式に全体型地域福祉アンテナショップとなり、地域の拠点として活動が展開されている。まずは、地域福祉アンテナショップとして認識してもらうために、誰でも自由に過ごせる場所、交流を持てる場所として毎週第一水曜日に「わくわくフリーデー」を実施している。2022年10月で設立1周年を迎え、土日も含めて、ほとんどの日で何かしらの団体が利用している状況となってきている。</li> </ul> <p>○協働型の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上砂町エリアの自治会にヒアリングを実施し、アンテナショップについて情報提供を行い、地域の中でアンテナショップとなりえる居場所について聞き取りを行った。ある自治会では、公会堂で夏の学習支援の居場所として、開放したいという意向を確認したが、コロナ禍で実現できていないとのこと。</li> <li>・社会福祉法人からのヒアリングで、施設の建設を考えている法人が、コミュニティスペースのような場所を建設予定であるとの、今後アンテナショップとしての動きがあるかもしれない。</li> </ul>	<p>○全部型(にこにこサロン)について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年目に入り、形が整ってきたが、振り返りを行いながら在り方の再検討をしていくことが必要。また、まねっつを見て参加される方が増えてきた印象を受けるが、まだ認知度十分とは言えないため、にこにこサロンの更なる周知が必要。</li> <li>・交通の便が悪く、自転車、自動車で移動できる方以外の参加者は近隣住民に固定されてしまう。</li> </ul> <p>○協働型について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協働型に登録することでのメリットがあまり感じられないため、説明する際に苦慮する。</li> </ul>	<p>○全部型(にこにこサロン)について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・にこにこサロンの在り方、わくわくフリーデーの形、頻度などを再検討していく。</li> </ul> <p>○協働型について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協働型地域福祉アンテナショップについて、自治会、社会福祉法人などに紹介をしつつ、居場所となりえる場所があるか検討していく。</li> <li>・地域の社会福祉法人、団体などに向けた、協働型地域福祉アンテナショップについての説明会を検討していく。</li> </ul>
2	相談や交流、活動の場が広がる	<p>○全部型(にこにこサロン)の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・わくわくフリーデーは自由な時間を過ごすことができる場で、参加者同士の交流も目的にあり、コミュニケーションが取りやすいような雰囲気やイベントを企画している。参加者間で、趣味について盛り上がる様子があったりと、次の展開が期待できるような様子も見られる。</li> <li>・コロナ禍で活動場所を探していた絵本の読み聞かせサークルと繋がりが、わくわくフリーデーの中で活動の機会を設けることで、活動の場の広がりがあった。</li> <li>・利用団体のプロフィールシートを作成し、利用者、各団体に向けて情報提供を行っている。そこから、新しい繋がりができることを期待している。</li> <li>・わくわくフリーデーの1周年に合わせて、有志で行っている検討会に、にこにこサロン利用団体にも参加してもらい、情報交換を行った。また、わくわくフリーデーの参加者にも参加しての感想を聴取した。</li> </ul> <p>○協働型の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現状では、実施できていない。</li> </ul>	<p>○全部型(にこにこサロン)について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現状では、Facebookやまねっつなどで周知を行っており、そこから参加に繋がった人もいるが、十分でないと感じている。</li> <li>・にこにこサロン内での飲食について、検討を重ねており、一時感染者数が減少した時にルールの改定を試みたが、感染者数が増加傾向に転じ、従来のままとまっている。</li> </ul>	<p>○全部型(にこにこサロン)について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい展開としてにこにこサロン利用団体のプロフィールシートを作成しており、さらなる周知と利用団体同士の新たな繋がりを期待している。</li> <li>・にこにこサロンでの取り組みから、次の展開が期待できるような働き掛けを意識して行っていく。現在は、わくわくフリーデーに西砂図書館から借りてきた本を置いて、本に親んでもらうことと合わせて、西砂図書館に足を運んでもらい、参加者の行動に広がりを持たせる試みをする予定。</li> <li>・にこにこサロンのパンフレット作成を行っており、周知を強化していきたい。</li> </ul> <p>○協働型について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協働型地域福祉アンテナショップについて、自治会、社会福祉法人などに紹介をしつつ、居場所となりえる場所があるか検討していく。</li> </ul>
3	個人の思いに仲間が募る、協働者が増える	<p>○全部型(にこにこサロン)の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・にこにこサロンの利用に向けた検討会は誰でも参加できる形を取っているため、多くの意見を取り入れることができ、市民が主体的に取り組むことができている。また、「にこにこサロン」を居場所として、サロン活動を行うこともでき、新たな活動を始めやすい環境を整えている。</li> </ul>	<p>○全部型(にこにこサロン)の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の拠点となる地域福祉アンテナショップとして、地域に根ざした取り組みを行なっていくために、地域の団体、活動と更なる連携が必要。</li> <li>・検討会に参加している有志が少なくなっており、固定化してきている。</li> </ul>	<p>○全部型(にこにこサロン)について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・にこにこサロンが居場所となることを周知しながら、サロン、団体や、市民との新しい繋がりを作っていく。</li> <li>・にこにこサロンについて一緒に考えてくれる仲間を増やしていく。</li> </ul>

## 地域福祉アンテナショップの設置

## 【総括】

## 第 1 地区

全部型については、自治会にヒアリングを行いながら、集会室の活用や、市営住宅の一角における展開を検討しているが、現状場所や空き部屋、空き店舗を含め、なかなか候補地に苦慮している現状となっている。一方で協働型については現在 3 箇所が立ち上がっており、住民が主体的に活動している団体と協働しながら立ち上げを進めている。ただ駅周辺のエリアということもあり、無償ではなかなかできない(活動費や会場費の捻出等)といった声が聞かれるのも事実で、アンテナの継続性を担保するための仕組みも再考の余地があるのかもしれない。

## 第 2 地区

全部型候補として、はねきんのいえの活動が進められている。住宅地にある一軒家という立地を活かし、「隠れ家」的要素を盛り込みながら、小中学生のトワイライトや、高齢者のサロン等、幅広い活動が行われている。ただ反面「わかりづらい」「どこかわからない」という声もあり、誰もが気軽に立ち寄れるような工夫を検討する必要がある。協働型については、現状立ち上げ件数は 0 件となっている。その理由として集まれる場所があまりない(錦町)という特徴のほか、自治会のエリアを横断する活動について、住民の奥ゆかしさからか、あまり居場所づくりが進まない要因も考えられる。

## 第 3 地区

曙町・高松町にそれぞれ立ち上がった協働型地域福祉アンテナショップを基盤とした拠点整備を進められた一方で、企画運営に携われる個人やグループの獲得に苦慮している。現状、地域福祉コーディネーターが中心に企画・会場確保・広報等の連絡調整をしているが、活動の継続性を考慮すると、Co 以外の人員確保が急務となっている。また、新規参加者の伸び悩みがあり、「多機能拠点」「多世代交流」等のテーマを据えたときに、どのように活動を展開していくべきか悩んでいる。

## 第 4 地区

全部型である BASE☆298 の運営についてはこれまで、実行委員会を中心に話を進めているが、普段の周知やイベントを重ねることで、ボランティアの参加も増え、活動のなり手・支え手も厚みが増している。ただ依然として入りにくい(何をしているところかわからない)という声をいただくことも事実。協働型については地区内で資料を作成し説明会を実施するなど工夫を凝らすことで、薬局や企業、専門学校等にアプローチをかけたが、資金面等の先立つ提案ができないため、今後 CSR など先方の協働心をくすぐる声かけや営業努力も必要なのかもしれない。

**第 5 地区**

全部型については、農福連携・食育の観点から「食べて元気いっぱいプロジェクト」を候補地のひとつとしてヒアリング等を進めている。また幸町地域懇談会にて、運営についても検討を行っており、現在参加されている方たちにも参加いただきながら組織化（実行委員会形式）を図る等の案が出ている。協働型については、現状立ち上がっておらず、その要因として①活動場所の不足②協働型運営のメリットが感じられない③助成制度がない、等が挙げられている一方で、小児科系のクリニックが多い地域性を活かし、薬局等を含めた事業系の空きスペース等についてヒアリングを行っている。

**第 6 地区**

全体型の「にこにこサロン」については、1年以上継続して活動をしてきており、わくわくフリーデーの参加者からは継続してほしいという声をいただいている。今後は、地域福祉アンテナショップ「にこにこサロン」としての在り方や、活動内容について振り返りを行う必要がある。各種広報ツールを見て参加される方も多くなってきた印象で、継続して周知を行っていききたい。協働型については、自治会、社会福祉法人からの聞き取りで、居場所について情報収集をしており、会場提供できるかもしれないところがあったり、社福法人の中では、アンテナショップのような居場所の設置を考えている法人もあった。居場所と居場所を運営する団体が一緒であればいいが、協働型設置の促進のため、各種団体、企業などにアンテナショップを PR していきたい。

**【意見をいただきたいポイントおよび委員会からの意見】****① 新しい住民層の取り込みについて****【委員意見】**

地域の役に立つことが楽しいと感じてもらえる仕掛けや、無理のないところからスタートできることを伝えていくことで、地域貢献の楽しさや、参加することのハードルを下げることにつながる。また、参加する側の視点として、安心して活動、参加ができる環境(保険など)の整備も必要。

**② 気楽に立ち寄れる動線上の工夫、福祉感を出さずに立ち寄れる工夫について****【委員意見】**

高い理念を掲げていると、福祉感が強く出てしまい、参加者に大きなプレッシャーとなり、入りづらい可能性もある。また、1 団体あたりの活動規模を大きくしていくよりも、小さな団体がたくさん地域にあった方が、参加者は選択ができ、参加しやすい。



## ③ 空き家情報、公的施設の活用について

## 【委員意見】

公的施設のこれまでの使い方を見直して、新しい観点から地域で活用することを検討できないか。例えば、「図書館は本を貸し出す場所」だけにとどまらず、新しいコミュニティが創造できるような場所に変えるなど、新しい発想で考えてもいい。また、公的な施設に限らず、自治会の集会場などの活用も検討する必要がある。

## ④ 協働型の促進方法について

## 【委員意見】

今の既存のグループを協働型地域福祉アンテナショップに登録してもらえそうな思考でいく必要があるのではないかと。お金の面について、理想的にいうと活動者がファンドレイジングをしていく、お金をつっていき流れができるとよい。今ある活動にアプローチし、イベント的なところから周知を進めていくのはいかがでしょうか。

## ⑤ 地域の特性を生かした運営について

## 【委員意見】

社会福祉法人に限らず、民間事業者の中には地域とのつながりに関心がある事業者もあるため、地域の事業者との関係性をつくり、連携もしていけるといい。

## ⑥ 交流が生まれる仕掛けの工夫について

## 【委員意見】

「居場所は人につく」ため、狙っている層の方にスタッフや講師として参加してもらい、関係性を深めていくのはいいと思う。また、順を追ってネットワークを構築していくのも大切だが、フットワーク軽く取り組んでいける姿勢も大切。

## ⑦ 農福連携の工夫について

## 【委員意見】

食べ物を無駄にしない、立川野菜を大事にするという観点から残った作物を地域に還元できるような仕組みを検討すべき。農家と福祉だけでなく、できた作物を循環させていく仕組みが必要。

## ⑧ 活動者の「やらなければのプレッシャー」への対処について

## 【委員意見】

「やらなければ」というプレッシャーを持つ方は、責任感が強く、活動的な代表者と推測する。一人が抱え込み疲弊していきたくないよう、「無理をしないでできるアンテナショップ運営」に重点をおいたガイドラインを作成するのもいいかもしれない。